

町と人へのまなざし

スーダン滞在中、湯川先生は町を歩き、ごく普通の市民生活を覗いてみることも重視しておられた。ハルトゥームと一緒に散策していた時、先生が、外国の都市を実際に訪ねてみることの重要性を強調し、「一度でも実際にこうして来ておくと、ニュースで『どこそこの町でデモがあった』などと聞いたときに、具体的イメージが描ける」と言っておられたのは印象的である。また、ハルトゥームで日本人三人それぞれが「自由行動」をしよう、ということになった時、私は史跡見学か書店探しに出かけ、若手大使館員氏はたしかラクダ市場を見学に行ったのに対し、湯川先生は町のモスクに飛び込んでイマームの説教を聴いて来られた。たしかウラマの役割をサッカーの審判(?)になぞらえて説明する説教だった、ということ、夕方に再会した時、イマームによるアラビア語での説教の内容を楽しそうに紹介して下さったのを覚えていいる。湯川先生はこうして限られた時間でも現代の中東の津々浦々のモスクで実際にどのように「イスラーム」が語られ、実践されているのかを観察している、イスラームの政治思想やウラマのネットワークをめぐる湯川先生の歴史研究は決して「現在」と遊離したものではないのだ、と痛感させられたものである。

ハルトゥームで数日を過ごしたのち、スーダン最大の綿花プランテーション「ゲジラ計画」の中心地であるワド・マダニーという町にも足を運んだが、湯川先生はこ

れにも同行して下さった。ここでもこの地方都市の街角に、ベレー帽姿で自転車に乗った、意外に洒落た(?)服装の老人の姿を発見して、スーダン人のファッション・センスについて論評しておられたりしたのを覚えている。

約一週間の滞在ののち、湯川先生はカイロに戻って行かれた。私の方はそのままスーダンでの現地調査に入ったが、最初の一週間のいわば「助走」期間を湯川先生に伴走して頂いたことは、その後の調査・研究の重要な土台となった。

以上が、私が湯川先生と一九八五年に初めてお目にかかり、エジプト・スーダンで一緒に過ごして頂いた際の記録の一端である。今書いていてもなつかしさで一杯となり、かけがえない思い出と実感する。深い感謝を記し、ご冥福を祈ると共に、私たちは先生が残されたものを——学問的業績はもちろん、中東の歴史と社会へのまなざし、人との接し方、「振舞い方」も含めて——今後の日本の中東研究のなかにできる限り活かし、引き継いでいかねばならないと感じている。(了)

早稲田の頃の湯川先生

佐藤 健太郎

北海道大学大学院文学研究科准教授

二〇一四年三月八日、湯川武先生が亡くなられた。先生の体調不良を最初に知ったのは、前年の十二月、年末恒例の『イブニング・ハルドゥーン自伝』読書会合席を欠席すると連絡を受けたときだった。風邪が長引いてということだったが、入院して検査という言葉に胸騒ぎをおぼえた。しかし、わずか四ヶ月後に先生とお別れをしなければならぬとは、そのときは思いも寄らなかった。きっと次の夏合宿の時にはまた元気なお姿を見せてくれるに違いないと信じていた。

私は、「NIHUプログラム イスラーム地域研究」第一期(二〇〇六～二〇一〇年度)の五年間、早稲田大学イスラーム地域研究機構(二〇〇八年まではイスラーム地域研究所)で湯川先生と共に仕事をする機会を得た。その間、先生には語り尽くせないほどお世話になったが、実をいうと、私が先生と親しくさせていたかどうかようになつたのは、それほど昔のことではない。二〇〇六年にイスラーム地域研究が始まるまでは、お話しをする機会はほとんどなかったから、一〇年にも満たないお付き合いだったということになる。私以上に湯川先生のことを知っている方は、同世代の研究者や慶應時代の教え子など、数多くいる

だろうと思う。ただ、先生の最後の職場となった早稲田大学で同じ時間を過ごした者として、先生自身も創刊に関わられたこの『イスラーム地域研究ジャーナル』上に、当時のことを中心に先生への思いを記すのも意味のあることだろうと考え、筆を執ることにした。

人間文化研究機構が地域研究推進事業を立ち上げて「NIHUプログラム イスラーム地域研究」が始まったのは、湯川先生が慶應義塾大学を定年退職される一年前の二〇〇六年だった。当時の研究代表だった故佐藤次高先生は、早稲田大学に中心拠点を置くにあたって、若手に加えてもう一人シニアの研究員が必要だと考えていた。若手が細かい実務を担当する一方で、年長者がまとめ役となって組織に重みを与えるといった体制を意図していたのだと思う。若手として採用されたのは私だったが、シニアの研究員として佐藤次高先生が白羽の矢を立てたのが、古くからの盟友ともいべき湯川先生だった。湯川先生は、日本における大規模な国際共同研究のさきがけである「イスラームの都市性」（一九八八～一九九一）の際にも中核的な役割を果たしていた。続く第一次のイスラーム地域研究（一九九七～二〇〇二年）では、慶應での常任理事在任期間と重なってしまったこともあって深く関与されることはなかったらしいが、先生の行動力と人望はこうした大規模な共同研究事業にうってつけだったといえる。

こうして湯川先生は、佐藤次高先生と共に

にさながら二枚看板のようにしてイスラーム地域研究を進めていかれることになった。この事業は人間文化研究機構が各大学・研究機関と共同で実施するという形だったので、湯川先生は人間文化研究機構からは地域研究推進センター・上級研究員に、早稲田大学からはイスラーム地域研究所・客員教授（後にイスラーム地域研究機構・研究院教授）に任じられた。慶應では定年まであと一年を残していたので初年度は非常勤扱いだったが、翌年からは専任扱いとなった。当初は五年間の予定だったが、二〇一一年に佐藤次高先生が亡くなられたため、退任を一年間延長し、研究代表としてイスラーム地域研究のリーダー役を務められた。

二〇〇六年四月にイスラーム地域研究所が設置された当初は、実は予算が動き出すのが遅れ、三ヶ月あまり開店休業状態が続いていた。それでも研究スペースとして、今は建て替えられてしまった四一―三一号館四階の一フロア、五部屋だけは確保できていた。どうやら、当時、学内にはこのフロアを使いたいと考えている研究グループが他にもいくつあったようで、時々、事務の人に案内されて下見に来る先生たちがいた。空きスペースと見なされるとまずいと思い、私は毎日そこに詰めることにしていたが、いかんせん若造一人では限界がある。いかにもうさんくさげな目でほぼ空っぽの研究所を見て回る人が何人もいた。そうした状況を湯川先生は察知されていたのだろう、まだ慶應に本務があったにもか



2012年3月、早稲田大学退官時のフェアウェルパーティーにて



2008年3月、クアラルンプール国際会議の準備で関係組織に挨拶まわり

わらず時間を捻出され、必ず週に一度、多い時にはそれ以上の頻度で、研究所に顔を出して下さった。湯川先生がいる時には、下見の人たちもどこか納得したような表情をしていた。とても心強かったのを覚えている。

冒頭でも記したように、私は早稲田で一緒にするまで、ほとんど湯川先生とは面識がなかった。『統治の諸規則』出版のお手伝いをしたことはあったが、そのときは直接お会いする機会はなかったし、他には一、二度酒席でお話したことがあるだけだった。そのこともあって、先生と一緒に職場で働くことが決まった時、私はいささか戦々恐々としていた。学生時代にアメフトでならした剛毅な湯川先生については、様々な「武勇談」を各方面から聞かされていたからだ。だが、もちろんそれは杞憂に過ぎなかった。些末なことにはこだわらない豪放磊落な先生は、また同時に細やかな気配りを欠かさない非常に優しい方でもあった（もともと往時をよく知っている人からは、「先生は丸くなった」と聞かされたりもしたが）。先生には、どんなことでも気軽に相談することができた。大規模な研究プロジェクトに不慣れだった私は、事務方との折衝も国際シンポジウムの準備もすべて戸惑うことばかりだったが、そうした時に経験豊富な湯川先生の意見をいつでも聞くことができるのはとても心強かった。それでいて先生は、あれこれと細かな指図をするわけでもなく、いつでも鷹揚に構えて下さっていた。湯川先生にひととお

り相談した後、最後に「おう、それでいいんじゃない、あとは健太郎君の思うようにやりなよ」と言ってもらえれば、もう何の迷いもなく事を進められる気分だった。

研究所の中では、湯川先生は圧倒的に年長の存在だった。二〇〇八年から新たに文部科学省による共同研究拠点の整備事業が始まったり、それに伴って学内で研究所が研究機構に格上げになったりするたびに人員は増えていったが、研究所のメンバーは、研究員も事務員も、もちろん学生アルバイトも、ほとんどが二〇代から三〇代の若手だった。そうした中、湯川先生の存在は、佐藤次高先生も期待したように、確かに年長者として研究所の重しになっていた。しかしその一方で、実は一番若々しかったのは先生だったような気もする。皆が集まる共同研究室には、誰かが持つて来たどこかの国の土産の菓子がいつも置いてあったが、真っ先に封を開けて中身をつまむのはしばしば湯川先生だった。また先生は（「そんなこと書くなよ」と叱られそうだが）ファストフードも好きだった。一時期、私は外で昼食をとる時間が惜しくて、毎日のように近所のマクドナルドのテイクアウトですませていたことがあったが、そんなとき頼まれて隣の湯川先生の分も一緒に買ってくるのが度々あった。先生と私の共通のお気に入りには期間限定のテキサスバーガーだったが、ドリンクだけは一応健康に配慮してコーラのゼロにするのが常だった。

年の差を感じさせないのは、二〇〇七年



2012年3月、長澤先生と機構メンバーとともに



2014年3月、御自宅にて



京都国際会議にて

からイスラーム地域研究の一環として始まった『イブン・ハルドゥーン自伝』読書会でもそうだった。一二名のコアメンバーに担当箇所を割りふって読み進めていくのだが、湯川先生も我々と全く同じように訳稿を分担して下さった。夏と冬の年二回、伊豆川奈にある早稲田大学のセミナーハウスでおこなわれる合宿では、先生も一緒にあって皆で三日間にわたり、ひたすら読み、食べ、そして飲むのだった。読書会では、生気な我々が図々しくも先生の訳文に注文をつけることもあった。そんなときも、先生は我々と対等な目線で、真剣に我々とアラビア語テキストの解釈を議論して下さいました。読書会の後は必ず飲みに行っていたが、ただ支払いの時だけは年長者の風を示され、少し多めに払って下さるのだった。

湯川先生は実に人間が好きで方だった。研究所の中でも先生は常に人の輪の中心にいられた。パーベキュー・パーティーだ、クリスマス・パーティーだといつては、ご自宅に皆を招いて下さったりもした。また、先生の交友関係は研究者や大学関係者ばかりではない。先生のお話に登場する人物は、企業、警察、病院、役所と非常に多岐にわたっていた。学生時代からの友人や、慶應での教え子なのだろうか、付き合っている長い友人・知己が本当に多かったように思う。あるとき酒の席で、任期付きの私の身分を案じてくれたのか、冗談半分で「イスラーム地域研究が終わったら、健太郎君にはどっかの病院の事務長の職でも紹介してあげるよ」と言われたことがある。何か評価してほしいポイントがずれてると思ったが、湯川先生だったら本当に再就職先の当てがあるのかも知れないと一瞬心が揺らいだ。

人が大好きな湯川先生は、早稲田界限にもあつという間になじみの店をたくさん

作ってしまった。焼き鳥屋のおやじも、中華料理屋のおばさんも、焼き肉屋のおじさんも、割烹居酒屋のおねえさんも、皆、先生の知り合いだった。何より、あの香港料理屋「太公望」の本場料理人を忘れるわけにはいかない。絶品の料理を作ってくれる彼は、また同時に、「そんないつペんにいろいろ作れないよ」とか、「先生はいつも飲んだ後に二次会で来る」とか、客への文句も多かった。けれども湯川先生はいつも楽しそうにその悪態を聞き流していた。

先生には知人も友人も教え子もたくさんいたし、誰にも分け隔てなく接する方だったが、それでもやはり一番大切にしておられたのが家族だったように思う。先生が、奥様のことや、娘さん、息子さん、そしてお孫さんの話をするときは、本当に楽しそうだった。プリンストン留学中のアメリカ大陸横断家族旅行のような昔話から、かわいなお孫さんたちの現在の話まで、先生の話しぶりはいつもお家族への愛情に満ちあふれていた。研究者や教育者としてだけでなく、家庭人としても、先生の生き様はお手本にしたいと思わせるものだった。

亡くなられる直前の昨年二月末、湯川先生は退院して自宅に戻られた。その後の十数日間は、慶應での教え子や早稲田でお世話になった面々が大挙してお見舞いに来たり（札幌から駆けつけられなかったのが残念だった）、あるいはご家族とのんびり過ごしたりしていたと聞く。最期の晩もご家族と共に食事を楽しまれたのだという。そ

れは、人に愛され、そしてご自身も人を愛してやまなかった、いかにも湯川先生らしい最期の日々だったように思う。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。